

☆Live Bar 雷神 Presents：ばぐーす長谷川のロック向上委員会☆

『第 8 回：嗚呼憧れの New Orleans』

～ニューオーリンズに魅せられて～

今回は「嗚呼憧れの New Orleans～セカンドラインに魅せられて」と題して、自身の音楽性にニューオーリンズからかなりの影響を受けたアーティスト/楽曲を紹介していきます。

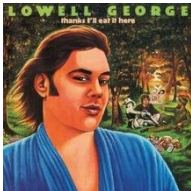
ニューオーリンズだとスグに分かる独特なファンクネス、そして不思議と心がポカポカ温まる人情味溢れる音楽に惹かれるミュージシャンはけっこう多く、この「ばぐーす長谷川ロック向上委員会」の2回目【ブルー・アイド・ソウル】をテーマにした際にも「アラン・トゥーサン詣（ニューオーリンズ詣）」の話が何度か出てきましたね。話で聞くだけではイメージが分かりにくいと思いますので、実際の音源を聴いていきましょう。

いつもと同じで、ご紹介できるのはほんの一部です。興味が湧きましたら、ご自身でもニューオーリンズ関連作等探してみてください。音楽で旅するニューオーリンズ、楽しいですよ♪

まずは、ロック界でニューオーリンズからの影響となればこの人！ローウェル・ジョージのソロ作から紹介します。

■100%ニューオーリンズ

1: Lowell George / Two Trains (Thanks I'll Eat It Here : 1979)



1979年、34歳という若さで急逝したローウェルのソロ唯一作。元々Little Featのために書いた作品も多く、Little Featの変わりゆく音楽性に違和感を持っていたことが窺い知れる内容になっている。プロデュースはローウェル本人。いきなりド頭からアラン・トゥーサンの曲のカバーだが、今回は別の「100%ニューオーリンズ」なナンバーを紹介。

<https://www.youtube.com/watch?v=Ds-34JDA8pE>

■ブルースロック草創期

2: The Paul Butterfield Blues Band / Get Out Of My Life, Woman (East-West : 1966)

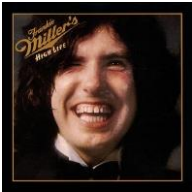


米国におけるブルースロックの先駆者：ポール・バターフィールド率いる The Paul Butterfield Blues Band の 2nd 作。1st 作はモダンシカゴブルースの極みだったが、この作品ではニューオーリンズやジャズも混合したホワイトモダンブルースの完成形を聴かせてくれる。この曲はアラン・トゥーサン作/リー・ドーシー歌のカバーで、オリジナルの重さ・ネチっこさを取っ払ったロック的な仕上がりとなっている。

<https://www.youtube.com/watch?v=NosKY02gyaY>

■ブルーアイドソウルから

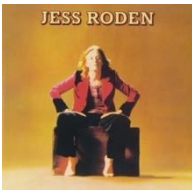
3: Frankie Miller / Play Something Sweet (Brickyard Blues) (High Life : 1974)



2nd 作。アラン・トゥーサン・プロデュース。フィリーソウルが流行していた事にレーベルが目をつけ、勝手にフィラデルフィアでミックスし直した曰くつきの作品。3曲を除き全ての曲がトゥーサンのナンバーだが、ミラーはそれを上手く消化しており、トゥーサンの個性に埋まる事なく秀逸なアルバムに仕上げている。この曲はスリー・ドッグ・ナイトやマリア・マルダーも取り上げている名曲だ。

<https://www.youtube.com/watch?v=Z80dRNhvn4Q>

4: Jess Roden / Reason To Change (Jess Roden : 1974)



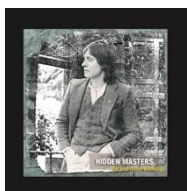
Jess Roden の作品中最も有名な作品のひとつ。録音はニュー・オーリンズとロンドン。プロデューサーはクリス・ブラックウェルとアラン・トゥーサン。この曲はニューオーリンズで録音さ

れており、アラン・トゥーサン+ The Meters の布陣でレコーディングされている。他楽曲の良さもピカイチで、ジェスを聴いたことがない初心者にも最もお勧めの1枚。

<https://www.youtube.com/watch?v=UHBWzHYO6a8>

5: Jess Roden Band / Get Ta Steppin' (Unreleased Live : 1974)

(Hidden Masters the Jess Roden Anthology : 2013)



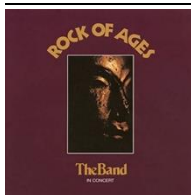
かなりニッチな6枚組BOX SETに収められた未発表Live音源。オリジナル作では上品にまとめられた感じのする曲も多いが、彼の真価はLiveにあり！かなり秀逸でカッコいいサウンド&グルーブを聴くことができる。特にこの曲はカッコ良く、ニュー・オーリンズ・ファンク・マナー満載の演奏を聴く事ができる(ロバート・パーカーの曲のカバー)。

■ 米国ルーツ音楽図鑑

6: The Band / Life Is a Carnival (Cahoots : 1971)



7: The Band / Din't Do It (Rock Of Ages : 1972)



60年代末~70年代初頭のロック・シーンを大きく変えたThe Bandの4th作。ロックの金字塔と言われる1stや2ndの凄みは薄く、5人のマジックはあまり感じられないが、だからと言って聴かないのは勿体ない。このアルバムからはオープニングを飾る1曲のみだが、アラン・トゥーサンの手を借りており(ホーン・アレンジ)、それが凄まじく良い。そして、アランに触発されてか、バンドそのものもブラッシュアップされているのが聴いてとれる最高な1曲。

そして、Cahootsリリース後のライブを収録した「Rock Of Ages (1972)」でもアランがホーン・アレンジにて参加。これがまた良い！さらには、リック・ダンコのBassが最高である。イ

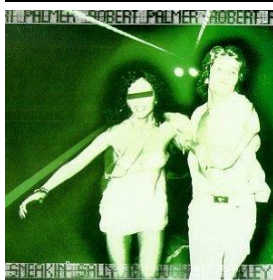
ントロだけで昇天しちゃいそうだ。ちなみにこの後の作品：Moondog Matinee (1973)ではアラン作/リー・ドーシー歌の Holy Cow をカバーしている。

https://www.youtube.com/watch?v=5luFQzU85_I

https://www.youtube.com/watch?v=-c_E-W3yhHY

■ 続・ブルーアイドソウルから

8: Robert Palmer / Sneakin' Sally Through The Alley (同タイトル : 1974)



Robert Palmer ソロ・デビュー作。当時彼が傾倒していたニューオリンズ色溢れる作品となっており、セカンド・ライン・ファンクな名作に仕上がっている。アルバム冒頭 Little Feat のカバー～自作～アラン・トゥーサン作のタイトル・トラックのメドレー的3曲で昇天は間違いないだろう。ニューオリンズ録音だが、なぜかドラムはサイモン・フィリップス。

https://www.youtube.com/watch?v=W4q9_XlsU3Y

■ 続・米国ルーツ音楽図鑑

9: Little Feat / On Your Way Down (Dixie Chicken : 1973)



The Band と共に、米国音楽の坩堝と言える Little Feat の 3rd 作。彼ら版ニューオリンズ憧憬音楽に仕上がっており、その核心的部分を既に体得できているのが凄い。モノマネにはならず Little Feat のフィルターをしっかりと通っており、ロックとの完全なる融合を図った成功例となっている。Little Feat の作品中、最も人気の高いアルバムなのもうなずけるだろう。

<https://www.youtube.com/watch?v=dwk79zJFIGQ>

10: Robert Plant, Alison Krauss / Fortune Teller (Raising Sand : 2007)



数々のグラミー賞を受賞した名盤。セールスでもプラチナ・ディスクを獲得し話題になった、Robert Plant と Alison Krauss のデュエット作/カバー・アルバム。ケルト、ブルーグラス、カントリー、フォーク、ロックを融合させ、現代的に聴かせる秀逸な作品だ。その中のニューオリンズを代表する名曲のカバーで、ブリティッシュのミュージシャンにこぞってカバーされるその曲をとってもカッコ良くアレンジしている。何度聴いても飽きない作品である。

<https://www.youtube.com/watch?v=s5DeIcYD6xE>